
恋人たちのP C小説

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋人たちのPC小説

【Nコード】

N7138E

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

趣味で小説を書く会社員の『私』は、同棲者の真理子にそそのかされてケータイ小説に挑戦する。だがケータイ小説を書くことは彼には不可能だった。やむなくPC専用のPC小説を書くことにするが……。

（前書き）

PCでご覧になることを前提としているため、携帯からではうまく読めない可能性が高いです。あらかじめご了承ください。

なお、Firefoxで表示した場合、途中から表示されなくなってしまうバグを確認しています。なぜなのでしょう……。

「ねえ、サトシさんもケータイ小説とか書いてみたらどう？」

晩酌のあとに真理子が言った。この女は私の妻……といたいところだが、単なる同棲者である。同棲というと何だか甘美に聞こえるが、読んで字の如くひとつところに住んでいるだけだ。それは同居者というのではないか。いや違う。私と真理子はそのような軽薄な関係ではない。

「ケータイ小説？ 最近流行ってるらしいね」

「らしいって……、読んだことないの？」

「ないな」

真理子の顔が呆れたように歪んだ。可愛い顔が台無しだ。ちなみに真理子は二十三歳、私よりも三歳若い。何がいたいのかという、私もそれなりに若いということだ。覚えておいてくれたまえ。

「遅れてるわね。そんなだからダメなのよ。ケータイ小説は素敵なお話が多いし、本屋さんでも売れてるのはケータイ小説ばかりっていわよ」

「本？ ケータイ小説なの？」

「そうよ。カワイイお話だったらケータイないところで読みたくなったりするじゃない。だから売れるのよ。あと表紙が素敵だったりとか。知り合いに勧めたりするときとかも本の方が便利だし」

「じゃあ初めから本で出せばいいんじゃないのかな」

「わかってないわね、あなた古いのよ。紙かケータイかなんて、今ドキ問題じゃないの。だいじなのは中身。あと読みやすさ。あなたみたいに何にも考えてないひとが書いた文章なんて、誰も読みたいと思わないのよ。気づいてないでしょ。いっつも紙を真っ黒にしてもう見るだけでウンザリ」

「まあ、君に読んでもらうために書いてるわけじゃないから」

「ひつどい言いぐさ。目の前の一人にすら読んでもらえないのに、見も知らないたくさんの人に読んでもらおうなんて、アマだからって甘いんじゃないの？」

「君のいうとおりだよ真理子」

私は書店へと馳せた。

ケータイ小説はキャッシャーにほど近い島に平積みされていた。手書き文字風のタイトルに、パステル調の装幀が爽やかだ。私はその一冊を手にとって、まずはぱらぱらとページを繰った。

それはハーレクイン・ロマンスを内出血するまで棒で打ったような小説だった。

隣に積まれた別な作品を開いてみる。

それはハーレクイン・ロマンスの頭を斧でかち割り、崖から川に落とすのを露天風呂から目撃したような小説であった。

同様に数冊調べてみたものの、やはり皆ハーレクイン・ロマンスの変形であつた。

妙である。ケータイ小説はワンジャンルなのだろうか。まさかそんなはずもあるまい。だが装幀のワンパターンといい、丸くねじれた文字で書かれたポップの林といい、よく見れば島の発するオーラはやっぱり私を拒絶し、こう語りかけてくるようである。

『あなたは岩波のウンコ色の本でも読んでなさい』

私は戦慄した。この威圧感には覚えがある。そう、真理子が風呂場に何本もシャンプーを置いていて、妙だなと思って手に取るとどれも殆ど使っていない、それを指摘したとき真理子が私にいった台詞、あれと同じ威圧感だ。

『あなたはリットル398円のボディシャンプーで髪も体も洗ってりゃいいんだから、つまらないこと言わないのよ』

私はそそくさと家に帰った。

だが見くびってもらつては困る。店頭で立ち読みした部分だけでも、私はケータイ小説に顕れているいくつかの特殊要素に気がついていた。

ひとつ。句点はそのあとに強く改行を導くと心得よ。
ひとつ。ときおり不思議な位置で改行を行い、アクセントをつけよ。

ひとつ。行間は大きく開けよ。
ひとつ。空行でリズムをとれ。

ひとつ。珍奇な文字の使用をためらうな。

ひとつ。一人称を愛せよ。

ひとつ。ストーリーには短い周期で新たな障害を用意せよ。

ひとつ。愛について多角的に語れ。

これは中々難しい注文である。とくに改行に関わる部分について、これをそのまま通常の小説に適用すると、容易に文章の呼吸を乱してしまう。私は沈思黙考した。

「なに難しい顔してるのよ」

「いや実はね、かくかくしかじか」

「そんなの考えたってしょうがないわよ。本で見るとスカスカかもしれないけど、ケータイで見たら画面の端っこではんばん折り返されてるんだから」

「なるほど、きみは物知りだな」

私は早速原稿用紙と万年筆、拡大鏡を携えて書斎に向かった。だが悪鬼のような顔をした真理子が素早く私のあとを追ってきた。

「バカねそんなレトロなやりかた今じゃもうあなんてアホなのケータイで打ち込みなさいよこのグズマヌケトンマ」

「君の悪態はステロタイプだね」

次の瞬間われわれ二人は激しいスキンシップを行った。私は真理子の拳が痛まぬように最大の注意を払ったが、成功したか自信はない。彼女の中指の皮が擦りむけていたら、あとでまた同じスキンシ

ップを繰り返す必要がある。

「実はね、ケータイで帰るメールより長い文章を書いたことがないんだ」

「ああそうじゃあパソコンで書けばいいじゃないのちょっとは頭使いなさいよ」

「そうしよう」

かくして私は、書斎の隅でインターネット巡邏くらいにしか使うことのなかったパソコンと向き合うことになった。私はこれで文章を書くのが嫌いなのである。詳しくは述べないが、変換のさいにかならず口語で文章と向き合わねばならない瞬間があるからだ。万年筆だとそれがない。散文と口語は違うから、これは少なからず私の文章に影響を与える。

さて、パソコンと向き合っふと考えた。ケータイ小説でありながらケータイで書かないというのなら、原稿用紙もパソコンもそれほど差はないのではないだろうか。それなら私の習慣として、紙に書く方が誠実だろう。だが真理子がいつ書斎に入ってくるか分からない。我々の愛に無用の刺激を与えぬためにも、ここは彼女の言うとおりパソコンで書くのが安全といえる。うむ、やはりパソコンで書くべきだ。そしてさらに考えた。せつかくパソコンで書くのなら、ケータイ小説でなくパソコン用の小説にしたほうがいいのではないだろうか。そうに決まっている。そこで私は題材をケータイ小説一流のカットルビーのような愛にとり、形式はパソコンで読むのを意識した書き方を採ることにした。

愛とは勿論私と真理子のそれである。

半日後、ささやかな短編が出来あがった。以下にそれを示そう。

[illegible]

題：『真理子抄』

作：
齊藤サトシ

形式：
PC小説

読み方： ブラウザの「編集」メニュー「検索」から、「」を
検索することで

ページ送りを行う。ページを戻す場合には「前を検索」などを使用。

「
」が節の終わりを示す記号なので、これを見つけたら次の「
」を検索すべし。

「のあとは必ず検索を使って跳ぶこと！」

チェック。これを読んでいるということは、「」のあと検索を
使わずに、

スクロールでページ送りをしたということです。それは禁止です。
お手数ですが、

上に戻って再度注意事項をご確認ください。

愛の始まり

「斉藤先輩、相談したいことが」

私は書類から目を上げた。

そこに立っているのは入社一年目の小林真理子、同じ系の可憐な女子社員であった。

「なんだい？ 仕事のことなら何でも聞いてくれたまえ」

「それが……ちょっとここでは話しづらくて」

「業務に関連することかな？」

「いえ、違うんです」

一体何だろう。私は寸時考えを巡らせた。

女子社員の悩みを聞くなど私の柄ではないし、実際に今までそのような相談を

受けたことなど一度としてない。

が、可愛い後輩のためだ。頼られれば立たねばなるまい。

「じゃあ、仕事が終わってからどこかでご飯でも食べながら聞こうか。それでいいかな」

「はい、ありがとうございます」

その五分後、やはり一年目の男子課員が私のところにやってきた。

「斉藤さん、今晚ビアホールでもいかがですか。十人くらい集まる予定なんですけど」

「すまない。今夜は予定があってね」

「そっすか。じゃまた今度ってことで」

ここは行間、いや章間というべきだろうか。いまは便宜上前者に準じよう。

かつて『行間を読む』とは、文中に書かれていない事柄を読み取ることを指した。

行間まできちんと読んでこそ文章、というような諒解すらあったように思う。

だがもし同じ文章の隙間から誰もが同じ情報を読み取るとするならば、果たして

本当に『書かれていない』ことを読んでいると言えるのか。そこにはとりもおさず

何かが書かれているのではないのか。

いま私はここに行間の新時代を拓こう。この行間は文句なしに『書かれている』のだ。

私はこの淫靡なスペースに、真理子への率直な感情を綴って愛の証としたい。

ここは私だけの空間、空中に浮かぶ心の小部屋だ。

愛の相談

夏の夕暮れは蒸し暑い。社を出た途端、体中からつつすらと汗が滲んできた。

小林真理子は予め約束していたとおり、近くのビルの本屋にいた。

「待たせたね。どこで話そうか」

「あ、私いいところ知ってるんです。そこでよければ」

「悩める君だ、好きに選びたまえ」

そこはウィンザーホテルの最上階にある高級レストランだった。

不測の事態だが、私には強い味方がある。カードだ。

「ここ一度来てみたかったです。前テレビですっごい美味しいって紹介されてて」

こんなことで後輩の気が紛れるなら安いものだ。

「ところで、悩みってなんだい？」

「実は、今日の飲み会のことです」

「飲み会？」

「です。ほら、みんなビアホール行ってくつて言つてたじゃないですか」

「ああ、言つてたね」

「それがあそこなんですよ、ホラ」

彼女は窓の外を見下ろした。

なるほど五、六階ほど低い隣のビルの屋上にビアホールが設置されていて、

いくつかある丸いテーブルを中心に、人影が虫のようにつごめいている。

実はこの以前から私は、小林真理子のことをかなり気にしていた。

課内でも独特の雰囲気をもつ彼女は、周囲の空気から一段浮き上がったような

存在だったのだ。入社直後はほかの男共も「若い」というだけで彼女にちよつかいを

出していたが、彼女の雰囲気にあてられると、軟弱な連中は忽ちに尻尾を巻いて

逃げ出してしまった。

だが私にとってこれは僥倖だった。彼女は毒の沼地の中州にそびえるシャトーだ。

その孤高の可憐さは、私にもっともふさわしい。

真理子よ、君は気づいていなかっただろうが、このとき君はままと私の張った

蜘蛛の巣に飛び込んできたのだよ。

愛の眺め

「もしかして、君だけ誘われなかったとか？ けしからんな」

「そうじゃないんです。あたし、こういうの好きで」

「え？」

「やつすいピアホールで同期の子たちが呑んでるのを見下ろしながら」

ら、男の人と

高級ワイン飲んで、フランス料理食べてとかそういうの。素敵じゃありません？」

なるほど、確かにいい眺めではある。

「斉藤さんって人を見下したようなところがあるから、一緒に来たらきつと

楽しいだろうなって思ったんです」

「ははは、光栄だな。でも気の置けない同期と飲むビールもいいものだよ」

私は顔にこそ出さなかったが、内心とても嬉しかった。

こんな可愛らしい後輩に、同期との友情をさしおいて一緒に呑みたいと言われるなど、

空前にして絶後である。

「じゃあ結局のところ、君の悩みって」

「はい、どうやって斉藤さんをお誘いしようかになって」

私の心のポールから、質実剛健の旗がするすると降ろされた。

このような言葉は私にはふさわしくないが、敢えて書こう。

私はこのとき、心の中でヒヤッホイと叫んだものだ。

愛の勘定

「ごちそうさまでした。楽しかったです」

私は颯爽とカードで支払い、小林真理子と並んでエレベーターに乗った。

「いつでも気が向いたときに声をかけてくれ。つきあうよ」

「わあ嬉しい、じゃまた同期飲み会の裏とかかなあ、次いつだろ、楽しみ」

「でも、そっちにも顔出しておいた方がいいんじゃないか？」

「エーッ、でも男の人と二人だと全額男の人持ちなのに、同期でワ
ーッと行くと

女でも多少は払わないとならないんですよ。馬鹿らしくって」

「君は経済観念に優れたひとだね」

「あは、先輩に褒められたの初めてかも」

真理子が金のかかる女だと気づいたのは、このしばらくあとだった。

カードの請求書を見て、思わず信販会社に確認を行ったくらいだ。

だが彼女の愛はプライスレスだ。比較にならない。

愛の提案

「ねえ真理子、僕のワイフになってくれないか」

真理子は小さな顔をステーキ皿から上げると、怪訝そうな目で私を見た。

「ワイフって?」

「いや、その、あのね、つまりその」

「サイフ? なら逆だと思っけど」

「いや、そうじゃなくて」

きょとんとした目で私を見つめ、テーブルナプキンで口を拭う仕草が可愛い。

「私にサトシさんの奥さんになってほしいってこと?」

「そう、そうだよ、ワイフってのはね、つまりWIFEで」

「?」

「この意味がわかるかい」

「よくわかんない」

この勘の鈍さも愛らしい。

愛の絆

「いいかい、ワイフってのはダブリュー、アイ、エフィー、だよな。
ダブリューはダブル・ユー、つまり二人のあなた、恋人同士のことだ」

「ふーん？」

「アイは愛」

「ふむ」

「エフィーは鉄だ。つまり、二人の愛が鉄のように固く結ばれたとき、

妻というものができるんだよ」

「……なんでエフィーが鉄なの？」

「元素記号さ」

「あたしたち、もうちょっとゆっくり考えた方がいいと思う」

「君がそついうなら、そつしよう」

このとき私は彼女の奥ゆかしさに感動した。

下品な女なら、私のひとことで有頂天になってワインをこぼし、折角買ってあげた

白のワンピースを台無しにしてしまったかもしれない。

愛のいぜない

「土曜にね、パパに会ってほしいの」

唐突に真理子が言った。私はこの日を一年待った。

「君のパパに？」

「そうよ。あたしたちもそういう時期じゃないかなって思うの。だめ？」

「もちろんOKさ。何を着ていこう」

「何でもいいわよ。でも下は短パンにしてね」

「短パン？」

「うん。うちの伝統なのよ。ほかの道具はうちで用意するけど」

「なるほど。郷に入ってはなんとやらだ。気に入ってもらえるように頑張るよ」

翌日私は会社の帰りに、短パンを買いに原宿まで行った。

彼女と一緒にになりたいという強い意志を示すために、私はストリート系ではなく

サッカー日本代表の炎の紋様をあしらった短パンを選んだ。

サテンのようなつるつるした肌触りが戦意を高揚する。よい買い物だった。

正直なところ、彼女の家で何が起こるのか私には見当もつかなかった。

彼女の父御にはなにか厄介な趣味があるのかもしれない。

だが彼女を手に入れるためにほかに方法がないなら、私は敢然とお父上と向き合おう。

愛の装い

「来た来た サトシさん、これつけて」

家の前で待ちかまえた真理子が、真っ赤なボクシンググローブを私に手渡した。

「なんだい？ これ」

私は背広に紺のネクタイ、日本代表の短パンに革靴といういでたちだ。

これに合わせるコーディネートとして、赤のグローブが適當だろうか。

「これからサトシさんはパパとボクシングするのよ。サトシさんがパパに勝たなくっちゃ、

あたしたち二人の生活は手に入らないの。がんばって」
なるほど、わりとよく聞く話である。

「その勝負に勝てば、君のパパが僕を認めてくれるということかい」

「ちょっと違うけど、サトシさんは深く考えなくていいのよ」

「わかった。きっと勝つよ」

真理子には悪いが、正直なところ、殴り合いは私の趣味ではなかった。

真理子には一応景気のいいことを言っておいて、お父上が現れたら何気なく挨拶して

穏やかな雰囲気を持ち込もうかなどとも思ったが、こんなこと真理子が知ったら

悪魔のように怒るであらう。間違いない。

愛の冒険

ファイティングポーズをとり、肩をいからせて家の中に躍りこんだ。

「靴は脱いでね」

後ろから注意が飛ぶ。私は無言で頷いて、三和土^{たたき}に革靴を脱ぎ捨てた。

「たのもう！」

叫んでみたが、返事はない。

玄関から真っ直ぐに延びる廊下は静まりかえって、居間とおぼしき障子紙から漏れる

柔らかな光が、午後の空気に無数の埃を浮かび上がらせている。

私は慎重に廊下を進んだ。

障子戸の前で立ち止まる。真理子の父がいるとすればこの部屋だろう。

私は棧に手を掛けて、静かにそれを開こうとした。

……グローブが大きすぎて、指が引つかからない。

はて困った。

真理子の父上との初対面に、足で障子を開くわけにはいかない。

かといってグローブを脱いで開けば、戦意喪失とみなされるおそれがある。

私は仕方なく肘を曲げて棧に引っかけ、なんとか障子を開こうとした。

軽い白木の格子がかたかたと鳴る。

行間はないこともあるのである。

愛の闘い

「ファワオアアアアアアアアアアアアアア」

突然凄まじい叫び声が起こり、障子を破って突き出されたブルーのグローブが

私の顔面に炸裂した。なんたる不覚！

「ファキンモロンマリコシュドウンビウィツザヤー！」

父上殿は興奮して巻き舌であらせられる。

続いて別な棒を突き破って繰り出された第二撃を、私は首を捻ってかろうじて躲した。

障子が外れて私の方へ倒れかかってきた。

どうしたものか。障子紙越しにでたらめに打ち合うべきか。

しかし私はお父上の体格を知らない。

真理子を得るのにボクシングの勝負を条件とするくらいだから、

ひよろひよろのうらなり中年ということはないだろう。

敵を知らずんば闘うことを得ず。

私はお父上の次のパンチを待ち、それが繰り出された瞬間に両手で二カ所の紙を

破って、両の手首で障子戸全体を掴んだ。

「えい、おう！」

愛の勝敗

腹の底から声を絞り出して、戸をぐるりと回転させる。

腕を取られたお父上の体重が、障子戸越しにこちらへ倒れかかってきた。

「ボクサーキック！」

私はその重みに向かって、渾身の前蹴りを繰り出した。

バキッという音がして、障子の棧が碎け飛ぶ。手応え、いや足応えあり。

「ハオウファキンファキンバスターツ……」

うめきと悪態が聞こえた。

私は障子戸を廊下の奥に放り投げた。

その向こうに体を折って立っていたのは、金髪碧眼、Ｔシャツに短パン、

ボクサーグローブの背の高いミドルエイジであった。

股間を両手で押さえている。

私は驚いた。真理子はハーフだったのか。そういえばあの美しい顔には、

どこことなくエキゾチックな血の色がある。

頭が少し禿げかかった父上殿の目には、明らかに不安と怯えの色が顕れていた。

若い私の前に、さしものお父上も形なしといったところだろう。

これは、勝てる。

「初めまして。真理子さんを頂きにあがりました」

私が左のフックを繰り出すと、父上殿は絨毯の上に沈んだ。

これで真理子は私のものだ！

結婚した暁には毎日私にかしずか

せ、朝のコーヒーと

新聞はベッドまで持ってこさせ、会社から帰ったときにはピンクのエプロ

いや、妄想はよそう。取らぬ真理子の何とやらだ。

愛の真実

「凄いワサトシさん！ あなたの前に六人の男がパパに倒されていたのよ！」

説明的な口調で、真理子がはしゃいでいる。

私は氣を失って伸びている父上殿を、少々不安に思いながら見下ろしていた。

「お父上が目を覚ますまで待つしかないね。起きたらぼくたちの仲を認めてくれるかな」

「何をいつているの?」

「いや、お父上に認めてもらうために今日来たわけだからさ。

そつえばお父さん、ずっと英語で喋ってたみたいけど、日本語は通じるの?」

「お父上つてマイケルのこと? このロクデナシはもうどうでもいいのよ」

「えっ?」

「この男はあとで私が始末しておくわ。二年ぶりの選手交代ね」

「えっ?」

「おめでとつ。今日からサトシさんが私のパパよ」

「えっ?」

思えばこれがケチのつきはじめだった。

私の夢想していた愛の生活は、一体どこへ行ってしまったのだらう。

いまの私の目標は、真理子を私好みの女にゆっくりと改造し、なんとかその気に

させて籍を入れることである。

そのためならば、いまは靴でも嘗めてやるぞ。

私は賞賛と感動の言葉を期待した。なんといつても、われわれ二人の愛の記録なのだ。それも精確な。海辺で撮った下手クソな写真などとはワケが違う。

「いつぺん死んでみる？　あなたが心の底でこんなこと思ってるなんて、わたし想像したことなかった。ひどいわ。許せない」

真理子の顔が恐ろしげに歪んだ。普段より一オクターブ低い彼女の声を聞いて、私の全身からは迅速に脂汗が吹き出してきた。パブロフ氏よ、私を雇ってみませんか。

「もしかして、君、注意書きを読まなかった？」

「注意書き？　なによそれ」

「ほら、三角形とかいろいろ書いてあったはずだけど」

「あつたわね。でもプリンタで打ち出してから読んだから関係ないわ」

「ああ、それは想定外」

「それより」

「はい」

「この落とし前、どうやってつけるつもり？」

「……週末に銀座でもいいこうか」

「ふん、上限はなしよ」

「それは……」

「なしよ」

「はい」

「じゃあ許してあげる。それとね、帰りにスポーツショップに寄りたいの」

「スポーツショップ？ 何を買うんだい？」

「グローブよ。こんどは黄色にしようかしら。サトシさんも準備しておいてね」

「準備？」

「今度の彼はすごい逞しいのよ。毎日トレーニングしてるんだって。あたしとずっと暮らしたいんなら、あなたも頑張って挑戦者を倒すことね」

「ははあ、なるほど」

どうやら来週は初の真理子防衛戦らしい。私は武者震いした。

（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7138e/>

恋人たちのPC小説

2010年11月12日11時21分発行